小さな発見大きな喜び
―剣持勇とタウト先生―

森　仁史

展覧会企画者にとって新しい作品の発掘や作家の創造のコンテクストの解読は先ず第一になすべき大切な仕事であり、目標となる事柄である。そのためには入念な調査や微細な発掘が必要なのは言うまでもない。こうした準備調査のあいだには、思わぬ発見や作家をひどく身近に感じる一瞬に出会うことがあり、これこそはまさに学芸員冥利に尽きる瞬間といえるだろう。今回遭遇したそんな数駒をご披露しよう。

図一　工芸指導所展会場のタウト夫妻一行（右から二人目が剣持）

「ジャパニーズ・モダン展」の主役剣持勇は一九三三年、商工省工芸指導所に就職して二年目にタウトの助手を命じられ、喜び勇んでその仕事に没頭することになる。剣持は東京高等工芸学校を卒業しているが、この学校の卒業生を主体とした型而工房（日本で最初のモダンデザイン実験同人）には誘われたが参加しなかった。後に同僚となる豊口克平が卒同校業後すぐに同人として機能主義デザインの実験に加わっているのに対して、剣持は在学中に確信できるデザイン理念を掴むに到っていなかったといえる。タウトやドイツ工作連盟について知識はあったはずだから、この年五月三日に来日したタウトに自分達の仕事を批評してもらいたいという思いとその意味は分かっていた。そのチャンスは八月四日に訪れた。タウト夫妻は蔵田周忠、久米権九郎に伴われて三越の指導所試作展会場を訪れ、言下に出品作品を厳しく批判した。タウトの工芸指導所招聘のきっかけとなったできごとである。タウトが久米を挟んで国井所長に語りかける写真はよく知られている。今回の調査で別な一点が剣持の手元に保存されていたことが分かった。〔図一〕それはキャビネ判のガラス乾板で、三越写真係と印刷された紙袋に収まっていた。だから、このとき数枚の写真が撮られたことは確実である。剣持が所持していたもう一枚の三越写真係の乾板は所長が中島商工大臣を案内するショットだった。これらから、この日にタウトなる重要人物が会場を訪れることは事前に知らされ、暗箱をかついだカメラマンとマグネシウムを焚く助手が待ち構えていたということになるだろう。彼らが会場を訪れた短い時間のうちに数枚の写真が手際よく撮影され、そのうちのタウトと一緒に剣持が写っていたショットが剣持の手元に残されたのだった。タウトの日記にはこの経緯は全く記されていないので、彼には知らされたいなかったのかもしれない。だが、会場でタウトを国井工芸指導所長に引き合わせるため、剣持が蔵田を通じて段取りしたようなのである。これも今回初めて通読できた剣持の自筆日記の記述で合点がいったことであった。また、剣持はこの日を「私にあっては歴史的なモニュメンタルな収穫」とも記している。この写真への愛着を裏書するかのようだ。

図二　陸奥国分寺仁王像

このときも、剣持は必ずしもタウトの出品作品への批判を総て肯定したわけではなかった。しかし、欧米の物真似ではなく、ものに即してデザインを洗練していく原則と妥協のない態度を強く印象づけられたことは確かだといっていいだろう。そこからタウトを彼にとっての唯一の先生と呼べるように感じるのはタウトの三ヶ月の仙台滞在期間が必要だった。

一一月一〇日、タウトは仙台駅に到着し、所長や剣持らが出迎えた。その月のうちから、タウトは休日になると剣持たち若手の指導所員たちと盛んに仙台郊外に出かけて、日本の伝統的造形に触れる機会をつ

くった。市内だけでなく作並温泉、塩釜、北七村…。最後の遠出も白石郊外の斎川村であった。ここの農家の美しさへの感動はタウトから剣持に感染している。一九三四年三月四日のタウトとの最後の遠出について、剣持日記にはこう書かれている。

キレイに、しかし不規測〔則〕に揃えた農家のワラの軒の並び乍ら産活の村。なんと云ふ絵画的な村であらう。僕は今までこんな美しい村を見たことはない。一個一個の家がみな一つとして美しくならざるはない。殊に座敷のワラの刈り方はユニークだ。そして不思議なことには建物は・・・生き生きとして、誰の作品と云ふ気持の先に来る銀座のモダン建築には及びもつかない気高さ気品を持ってゐる。ここに見る偉大なる設計者の力の精神、其して、トラヂションの威力、底力。

先生夫妻がウンデルワーレを連発するのも無理はない。一軒の豪農の内部を見に上る。

剣持家は仙台藩家臣であったが、父親が職業軍人であったため、勇は東京郊外に生まれ、麻布中学から芝浦の東京高等工芸に入ったので都会っ子といってよかった。登山やスキーが得意な剣持はこけしや民俗玩具にも興味は持っていたが、それを自己の造形の核心と重ねて考えるところまではつきつめてはいなかった。

この間の事情を物語るもう一つの写真が見つかった。タウトは仙台滞在中の一九三三年一一月二〇日に原町薬師を訪ねた、と日記に書いている。そこで、プリミティヴな仁王像に感心している。これについては、今年八月に早稲田大学図書館で公開されたタウト撮影写真アルバム（岩波書店蔵）の一ページに貴重なドキュメントが見つかった〔図四〕。それはペン描きの戯画で、大きな草鞋の下げられた山門でタウトらしき人物が黒幕をかぶって暗箱を覗いている。山門によじ登ってライトを持っている人物は"KENMOCHI"と記され、彼は"Harry up, Please I can't hold more"と叫んでいるのだ。タウト日記には撮影に出かけた日の記述はないが、別な日に長身の剣持を伴って格子越しに照明をあてる助手の手を痺れさすほど夢中になって撮影したのであった。タウトは日記にこの吽像のスケッチを掲載し、後に『日本文化私観』に挿図として両像をとりあげている。そして、剣持の手元にはこの阿像の写真乾板〔図二〕が先の二枚の乾板と同じ紙箱に保存されていた。スケッチと写真の像容から、この仁王像は実は仙台市若葉区木ノ下の陸奥国分寺仁王門に安置されている二像であって、タウトは本堂が薬師堂であるこの寺を原町と勘違いしたらしい。仁王像は阿吽とも今も往時の姿をとどめており、筆者も先日二人がカメラを構えたあたりからとくと確かめることができ、嬉しくなった。

剣持のタウトへの敬愛の念は彼がひとかどのキャリアをもっていたからではなく、この斎川村の建築や仁王像へのタウトの接し方に見られるように、自分が眼に触れて得た感動を受け入れる素直さと、それが現代的な造形の追及と全く齟齬を来たさないという姿勢であったと思われる。そうした人格と実践を貫く志こそはただ文章や作品を通じて学びうる理念や思想によってではなく、日々の指導や生活のなかでふれあった師弟ならではの感覚によらねば伝わらない。それを明かす小さな写真〔図三〕を実は最初に手にしたのだが、師弟の間に流れる親密な空気と、トーホクを満喫している様子のタウトと敬愛を込めた眼差しを送る剣持がなんとも言えず愛らしく、しばし見とれてしまった。剣持はこのとき心から先生と呼べる人物に出会ったのだった。これら三枚の写真から生身の彼らが共有した気分を感じ取ったとき、剣持の造形の秘密に迫る大切な鍵を手にできたと感じた。このとき、企画者として本展の主要なモメントを確かにすることができたとひどく嬉しくなって、深夜にひとりでに頬がゆるんでくるのを抑えることができなかった。会場でこの小さな写真を是非見つけて頂きたい。筆者のその時の喜びをお分かちしたいのである。

（松戸市教育委員会　学芸員）

図三　タウト夫妻と剣持

図四　B・タウト《撮影するタウトと剣持》

視る

414号

京都国立近代美術館ニュース　9-10月号　2004

隔月発行　第414号　平成16年9月1日　発行

没後二十五年を経て振り返る　八木一夫からのメッセージ／三浦弘子
小さな発見大きな喜び―剣持勇とタウト先生―／森仁史
吹田草牧／『渡欧日記（連載77）』